

## 呉昌碩早期における文人的思考の考察

A study of Wu Changshuo's literary thought in his early period.

利根川 千枝子

Chieko Tonegawa

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：呉昌碩，文人，詩書画篆刻

Key words : Wu Changshuo, Literati, Poetry, Calligraphy, Painting and Seal carving

### 1. 研究目的

呉昌碩(1844-1927)は、中国清朝末期から中華民国初期にかけて活躍し、詩・書・画・印、四絶をもって「中国最後の文人」と称せられている。呉昌碩は早期において多くの師友を訪ね見識を深めており、文人として大成するための礎を築いた重要な時期である。呉昌碩は刻印の側款や自ら作成した印譜及び書画の跋文に、制作時の状況、心情などを記している。これらの資料を書法の一分野として芸術的に捉えることはあるが、文人的思考に着目したものは少ない。本研究では、呉昌碩が遺した資料により、呉昌碩の文人交流を考察し、呉昌碩の文人的思考の本質を明らかにするものである。

### 2. 研究実施内容

#### (1) 呉昌碩の文人的思考の形成

呉昌碩は、浙江省安吉県彰呉村の一読書人の家に生まれた[1]。呉昌碩は県の学官(潘喜陶)の勧めで試験を受けて秀才となったが、官職とは性が合わず、篆刻、書法、芸術を極めるため、師友を訪ね学識を深めた[2]。この学問研鑽により呉昌碩の文人的思考が形成された。

#### (2) 呉昌碩早期の文人交流

呉昌碩早期の文人交流による学問研鑽を呉昌碩が遺した印文と側款、跋文から考察する。呉昌碩が自ら師友について記述した短文を集めた沙匡世校注『呉昌碩石交集校補』(1992.3 上海書画出版社、以下『石交集』と略称)を主資料とし、師友十八人との交流を六項目に分けて取り上げる。

##### ① 啓蒙の師との交流

潘喜陶、呉山との交流がある。潘喜陶(1823-1900)について『石交集』の記載を挙げる。

「俊補博士弟子員、出海寧潘先生之門。先生名喜陶、(略)爲吾邑校官。(略)俊乙亥赴試武林、見

先生于邸舍。」

〔俊(私)は博士弟子員(秀才)に補せられたが、海寧の潘先生の門に出ている。先生の名は喜陶、(略)吾が邑の校官であった。(略)俊(私)は乙亥の年(1875)に武林(杭州)に赴いて試験を受け、先生と邸舎でお会した。〕

潘喜陶は呉昌碩の啓蒙の師であることがわかる。杭州で試験を受けて潘喜陶と会ったとあるが、松村茂樹は「呉昌碩は郷試を受験し、受からなかった。」[3]としている。呉昌碩は、この受験と結果によって潔く芸術の道に専念できたのである。

##### ② 文物鑑賞による交流

金傑、呉雲との交流がある。呉雲(1811-1883)について『石交集』の記載を挙げる。

「家藏三代彝器及秦漢印甚夥。(略)因得縱觀法物戮瞿、於摹印作篆稍有進境。封翁之惠居焉。」

〔家に蔵されている三代(夏・商・周)の彝器及び秦漢印は非常に多く、(略)文物を自由に見ることができたので、刻印と篆書においてしだいに進歩したのである。封翁が住まわして下さったことは、本当にありがたかったのである。〕

呉昌碩は呉雲のもとで食客となり、貴重な古物を自由に鑑賞できたことに感謝している。ここでの貴重な体験が呉昌碩を文人として開花させる礎になったことが窺える。

##### ③ 文字学・金石学による交流

金樹本、方濬益、凌霞、陳殿英との交流がある。金樹本は古玉の鑑別に優れ、収蔵は甚だ多かった。方濬益は訓詁小学に精通し、古器、拓本を多く収蔵した。凌霞は小学・金石学に打ち込み、関連する著書もあった。陳殿英は古文学派経学に精通した学友であった。彼らとの交流から、呉昌碩は文字学・金石学への造詣を深めていったのである。

#### ④刻印による交流

章綬銜、沈秉成との交流がある。章綬銜は呉昌碩に刻印を依頼し、その刻印について近人を宗とせず「古」に学び、その本質を具えていると称えている。沈秉成は進士出身の大官である。呉昌碩は沈秉成に印を刻し褒められており、その感謝と同時に沈秉成の文人交流の姿勢を称えている。

#### ⑤書法および詩法による交流

杜文瀾、楊峴、周作鎔、畢兆洪、錢國珍、徐士駢との交流がある。楊峴(1819-1896)について『石交集』の記載を挙げる。

「不以行輩爲嫌。喜余篆刻，謂爲近古，爲作詩序及印存蕪園圖諸詩，余輒刊印報之。」

〔同年輩として付き合うことを嫌がらなかった。私の篆刻を好んで、近古と称し、私の為に詩序及び印存、蕪園図の諸詩を作り、私は印を刻してこれに報いた。〕

楊峴は呉昌碩の学問を尊び、呉昌碩と同等の文人として交流していたのである。

#### ⑥画家との交流

楊晋藩、費以羣との交流がある。楊晋藩は詩を能くし、草書山水を工みにした。呉昌碩は、楊晋藩の画を高く評価し大切に蔵した。呉昌碩は、費以羣が父である費小樓の画法を最もよく伝えていることを天性のものであったとしている。

### 3. まとめ

呉昌碩の文人交流の特徴を次の5つに分類して考察し、これらが呉昌碩の文人的思考の本質であることを明らかにした。

#### 1.地縁によるつながり

潘喜陶、呉山、章綬銜、楊峴、周作鎔、畢洪、錢國珍、徐士駢、楊晋藩、費以羣との交流に見られる。呉昌碩は、貫籍の安吉、妻の実家がある帰安、それらを包含する湖州を地縁として文人交流をし、文人的思考を育んだ。換言すれば湖州が文人呉昌碩を形成したともいえる。

#### 2.上下関係における相互尊重

呉雲、方濬益、章綬銜、沈秉成、杜文瀾、楊峴、錢國珍との交流に見られる。呉昌碩は、収蔵家、大官、師という自らよりも上位にある人々とも交流している。そのような人々も、呉昌碩と、ほぼ対等の関係で接している。これは文人である彼らが、呉昌碩を「詩書篆刻」に長じた文人として尊重しているからである。文人は立場に関係なく相互尊重により対等の交流をしていたことがわかる。

#### 3.「古」の尊重

呉山、金傑、呉雲、方濬益、凌霞、陳殿英、章綬銜、楊峴との交流に見られる。「詩書篆刻」三絶(後に「詩書画篆刻」四絶となる)に長じた文人になるためには、まずはその根幹たる学問が確立されなければならない。呉昌碩はその学問に、古文学派経学を選び、「古」を尊んだのである。

#### 4.孤高の尊重

呉山、金樹本、凌霞、楊峴、徐士駢との交流に見られる。出世の道を歩む人の中には、不遇であれば、対極にある隠棲の道に転化する人も多い。だが、呉昌碩は隠棲に逃げず、出世の道を歩んだ。これは孤高の人生といえる。そのような呉昌碩は、さまざまな理由で、同じく孤高の人生を送っている人々を尊重し、称えるのである。

#### 5.異分野への尊重

杜文瀾、周作鎔、畢兆洪、徐士駢、楊晋藩、費以羣との交流に見られる。呉昌碩は、志向が異なる分野であっても良さを認めて尊重し、それらを好む人にも敬意を払い交流していた。当時の呉昌碩は画家の側面を具えておらず、師承となる画家を求めていた。このことが画という異分野への尊重につながり「詩書画篆刻」四絶の文人としての基盤を確立できたといえる。

#### 参考文献

- [1] 松村茂樹「呉昌碩の生誕地と「蕪園」をめぐって」『大妻女子大学紀要-文系-』第50号 2018.3.16 大妻女子大学は「安吉県東街読書楼故宇」が呉昌碩の従祖・呉応奎の故居で、呉昌碩の生誕地であり、「蕪園」もここであるとしている。
- [2] 呉東邁『呉昌碩』1963.12 上海人民美術出版社の邦訳である足立豊訳『呉昌碩 [人と芸術]』1974.7.20 二玄社 による。
- [3] 松村茂樹「呉昌碩の官途」『中国近現代文化研究』第20号 2019.3.31 中国近現代文化研究会

#### 学会発表

- [1] 利根川千枝子「呉昌碩早期における文人的思考の考察」中国文化学会例会 2023.3.10.大妻女子大学(東京都千代田区)

#### 付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(課題番号 DB2328)「呉昌碩早期における文人的思考の考察」を受けたものです。